

槐

かい

岡井省二創刊

平成18年12月号

平成十八年十二月一日発行 第十六巻第十一号 通巻第一八六号 毎月一日発行
平成三年九月十八日第三種郵便物認可



心

高橋将夫

手に触れて心に触れて草の露
秋の水心の襞の映りをる
ななかまど冷たく燃えてをりにけり
蟋蟀の入り込みたる脳裡かな

手品師の消してしまひし秋の虹
星飛んでフランス人形目をつむる
銀漢やドンキホーテと言はれゐて
夢の世を真一文字に鳥渡る
仏にも鬼にもなれず大花野
白桃の濡れて心の乾きかな
大日のまとふ錦の秋の山

秋 楽 し

松下八重美

雨あがる出雲大社の新松子
神前に二礼四拍手秋深し
一位の実おみくじ結うてゐたりけり
宍道湖に嫁ヶ島あり秋夕日
粟稔る大根島となりゐたる
堀川をめぐりてゐたる赤とんぼ
仲秋の島の掛橋渡りけり
風わたる分水嶺の紅葉かな
山巒をのぼる雲あり蕎麦の花
秋の昼仔牛に指を吸はれけり

特別作品

柿熟るる隣りはひよこ鑑別所
鶏の放ち飼ひあり木の实降る
松虫草丘より風の吹き下す
満載のコンテナ船や秋しぐれ
編み上る竹の花籠秋日差す
竿の穴出で入りしたる秋の蜂
梨狩や自分の食みし梨の数
たづね来し姨捨山は霧の中
三角州いくさ場のいま芒原
山上の湖の靄女郎花

槐安集

市場基巳

数へらる数へ切れざる新松子
青みどろいつしか水の呼吸塞ぐ
海の上を鳴きわたりたるホトトギス
その宿の名も古りにけり迎盆
貧乏に生きたり蟻の黒黒す

水野恒彦

少年のこゑはや錆びし九月かな
あをあをと銀河は近し人欲しや
椿象の畳を歩く子規忌かな
印伝のさぬふをさがす秋の暮
仲秋や藪養生の火を焚いて



延広禎一

北溟に魚跳ねてをる省二ノ忌
風の盆弥勒菩薩の指おゆびかな
泥眼のよろぼふ夜の大花野
蛇瓜「愛の流閉地」よりのくびれくびれてガンダーラ
う蛇瓜リインド原産つちやらかす恋の重荷やざくろの実

加藤みき

雁渡し太閤の城日々に見て
天空の鯉縞なり水の秋
自然薯を嬰洗ふかに洗ひをり
秋収め稻荷の鳥居一つ建つ
秋の海東天にはや巨き星

石脇みはる

ひかり飛ぶもの多かりし萱を刈る
大原や風船葛と白壁と
かりがねの空に向うて跳躍す
しほかまの港の玄き秋の潮
後の月木の橋白く伸びてをり

中島陽華

芦の火に映えてくつきり翁眉
トドの形の抱き枕と熱帯夜
箒目のきちんと月見団子かな
菊月や子が生れ犬の消えにける
ともがらの呉るる梅干曼陀羅華

竹内悦子

ひようたんや岡井省二の忌なりける
青栗に覗かれてをる足湯かな
菊月や狸々現れて謡ひける
朝風呂やはちきれさうな秋の穹
蓑虫や越中ふどし干されある

栗栖恵通子

満月を来るあをがねの麒麟かな
つれなさにゐのこずちなどつけてやる
みぞはぎや托鉢尼の振り向かず
すいつちよん小腹の空いてをりにけり
流星やロフトの隅の玩具箱

大島翠木

姫宮にほろりと秋の蜥蜴消ゆ
男郎花に風あり橋を赤く塗る
他生の縁さはにもみずる女坂
楽章のベニスに死すや秋深む
散骨のダム渡りゆく雁の棹

黒田咲子

くさびらの省二の碑かな秋彼岸
忌日きて手折るもならぬ曼珠沙華
鹿垣の鹿ヶ瀬峠日の陰る
一葉はやもみづる安珍桜かな
黄せきれいの百も承知よ日の岬

雨村敏子

光年といふ単位あり草の花
継色紙雲漢に水流れける
見えてみて吾亦紅にとどかざる
冬瓜に人近くきて笑ひけり
おくんちの床に置きたる法螺の貝

小形さとる

爪先を桔梗として寝まるなり
塩振つて九月の海に出でにけり
犬枇杷よ父を越えしには非ず
秋彼岸プラチナ色の股で行け
生姜磨つて石山の雲流しをる

本多俊子

何唱ふわたしの前のわらひ茸
露草の上に編笠置かれあり
太平洋かげりて精霊とんぼかな
ゆつくりと生きることかな衣被
秋螢闇の柱をのぼりゆく

天野きく江

結界のこちら鶏頭ばかりかな
いみじくも無花果畑の翁かな
二百十日屍を運ぶ蟻一群
身罷りの日と思はずに虫すだく
秋天に大きな楔打つてゐる



槐市集

秋岡朝子

蠟螂の枯れぬ一茶の顔をして
虫時雨モーツアルトのカデンツァ
秋霖や消えてはつきし螢光灯
一切が夢であります萩の露
晩年や彩よく揚がる秋茄子

犬塚芳子

屋形船秋扇そつと出しにけり
つくばうし骨身透かさる思ひかな
秋茜川 従へて低く飛ぶ
甘藷掘る蹠に仄か土の声
蟋蟀のころころ闇を丸くせり

岩下芳子

たべごろの棗となりし飛鳥川
秋高し物の始めの尉と姥
丸田町上る老舗の新豆腐
白萩をよごさぬやうにくぐりけり
東山へ一本道の曼珠沙華

岩月優美子

鬼胡桃今朝の水嵩増してをり
あらあらと雲の過ぎ行く衣被
昼闇に竹伐る音の響みたる
爽やかや御岳うたきに祈る影のあり
星月夜綿津見深き眠りかな



槐集

高橋将夫選

鈴虫の夜とイカロスの昼なりし
枚方

中野 京子

芋頭洗ひあげたる男振り
枚方

近藤きくえ

生と死のあはひに穂絮飛んでをり
敗れ蓮時のつまりし穴の数

おほどかにすくはれてをり仏手柑

馬肥ゆる朝の五千歩なりしかな

アステカの暦見てをり夜半の秋

岡崎

岩月優美子

野分晴れジュラ紀の天気まとひたる
岡崎

近藤 喜子

十戒を通り抜けたる花野かな

月光やオルフェの琴の響みたる

蟋蟀の鳴くや夜空の高くあり

虚と実の狭間で揺るる芦の花

初秋の風に消されし砂絵かな

恋ともちがふつくつくの声吹かれぬる

薄き紅ひく五指にある秋思かな

達磨忌や岩に大きな穴一つ

盛んにも荔枝裂けたる夕陽かな

松原 仲子

朝顔に吸ひ込まれゆく日の匂ひ
枚方

植木 戴子

夕日よりころげて来たる丹波栗

冬瓜の括れに包丁入れてをる

落款を収めてをりし白露かな

銀河往来 高橋将夫

◇「槐集」観照

おほどかにすくはれてをり仏手柑 中野 京子
人はふと何かを見て救われたと感じるときがある。掲句では仏手柑を見てそう感じたところがほほえましい。仏手柑の字面もさることながら、あの均整のとれていない形にむしろホッとさせられるものを感じたのだろう。まこと、邪心がない。おおらかに救われている一句。

十戒を通り抜けたる花野かな 岩月優美子
仏教に不殺生、不邪淫などの十戒の戒律がある。モーゼの十戒も殺人、姦淫、盗み、偽証などを戒めている。それらをクリヤした精神の位相を作者は花野の季語に託している。この花野は十戒のイメージを作者なりにとことん追及した結果の花野なのである。

薄き紅ひく五指にある秋思かな 松原 仲子
紅をひく華やぎとはうらはらに、指先にあるのは秋思だという。憂いを楽しんでいるといった風情かもしれない。その程度の思というこのことなのだろう。

芋頭洗ひあげたる男振り 近藤きくえ
芋頭を「ごしごし」と洗った。きれいになったのを見て、いい男振りになったとはまさに俳諧。いい男振りを、芋頭を洗ったようにと形容すれば、ますます俳諧。

野分晴れジュラ紀の大気まとひたる 近藤 喜子
地球の大気の組成は太初よりさまざまに変化してきた。ジュラ紀は約2億年前、シダ類が繁茂した、爬虫類全盛の時代。野分の後の空と荒涼とした大地のさまに、作者は触れたことのないジュラ紀の大気を感じたのだろう。

夕日よりころげて来たる丹波栗 植木 戴子
栗がころがってきた。まるで夕日の中からころがってきたように。なんだか日本昔話の世界に誘われるような一句。丹波も大いにきている。

夏葱のにはひ消したる解脱かな 南 一雄
解脱とは何か。束縛からの離脱。現世の苦惱から開放され絶対自由の境地に達すること。そして、作者によれば、解脱とは夏葱の匂いが消えるほどのことだという。それにしても、生死は永遠の課題。

人の世の穴に入る蛇見てしまふ 大山 里
蛇が穴に入ったのを見たからといって、どうということはない。しかし、「ひとの世の」と言われて蛇穴ががぜん暗喩性をおびてくる。人間臭くなってくる。

冬瓜を水晶煮して静かなり 谷村 幸子
冬瓜が水晶のように透き通って煮えているさまはなんとも風情がある。ちなみに、作者は先ごろ目の手術をされたが、水晶体は本句とは無関係。念のため。(以下略)